

「北陸地方弥生時代後期の集落について」

庄田 孝輔

弥生時代後期の北陸地方の集落動向を土器圏との関係から比較、検証することを行った。分析方法として土器研究に基づき甕の出土比率を元に地域を設定し、総遺跡数、新規立村数、廃絶村数、遺跡の継続率を比較した。その結果として福井地域では猫橋期（弥生後期前半）の集落数が多く、弥生文化の安定的な展開が伺われた。法仏期（弥生後期後半）には集落数が増加する。ただ地域差が見られ、その原因として土器圏の変化による集落動向の差の可能性を指摘した。月影期（弥生終末期）には集落数がピークをむかえる。そしてこの時期を境に多くの集落が廃絶する。越中では法仏期とされていた集落減少の画期は一期遅く月影期であった。また松任地域では法仏期に廃絶し、宝達地域はほとんど廃絶しない。この要因として宝達地域では土器圏を変えて政治的に力を維持した集団が集落を維持した可能性があり、松任地域では局地的に自然環境が変化したことが考えられる。



有段擬凹線文甕